

【はじめに】

超高齢化社会が急速に進む中、医療・介護サービスなどの専門職が、様々な情報を共有し、その全体像を描きながら専門的な知識を活かし、最適な療養支援を行うためには、多職種連携が必要不可欠である。

今回、当薬局における、多職種連携成功事例を報告する。

【症例】

Aさん 89歳 男性 独居

[病名]

前立腺肥大症、高血圧症、不安障害、肺気腫、抑うつ、脳梗塞後遺症、混合型認知症、上室性頻拍症。

[処方薬]

- Y医院(11種類)

ダイオウ・センナ配合錠、ビフィズス菌、タムスロシン、メチルジゴキシン、エスシタロプラム、
ジルチアゼム、アルプラゾラム、ファモチジン、ブロチゾラム、八味地黄丸、トリアゾラム

- Hクリニック(1種類)

アムロジピン

ケアマネージャーより、服薬コンプライアンス不良との相談を受け、H25年7月より居宅療養薬剤管理指導を開始。

【問題発生】

(@_@;) ! ?

自宅に患者さんがいない！

理由・・・

- 周辺散策が趣味(徒歩や自転車で、自宅周辺の周遊を楽しんでいる(^o^))
- 認知症のため予定訪問時刻を忘れている！！
- 自宅には電話がない。(携帯電話もない・・・^^;)

【ケアマネさんに相談してみよう！】

ケアマネからの提案

薬剤師訪問の直前に
声掛けしてみても？

ケアプラン変更

ヘルパー訪問時間
15時半～ → 9時～

ヘルパーから
患者へ声掛け

「この後、薬剤師訪問があるので、自宅で待機して下さいね。」

【その結果…】

患者さんが**自宅にいる！！**

スムーズに居宅療養薬剤管理指導を行えるようになった。

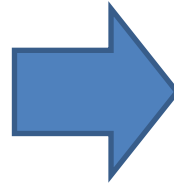
アムロジピンの削除に成功！

介入期、Hクリニックへの通院は中止となる。

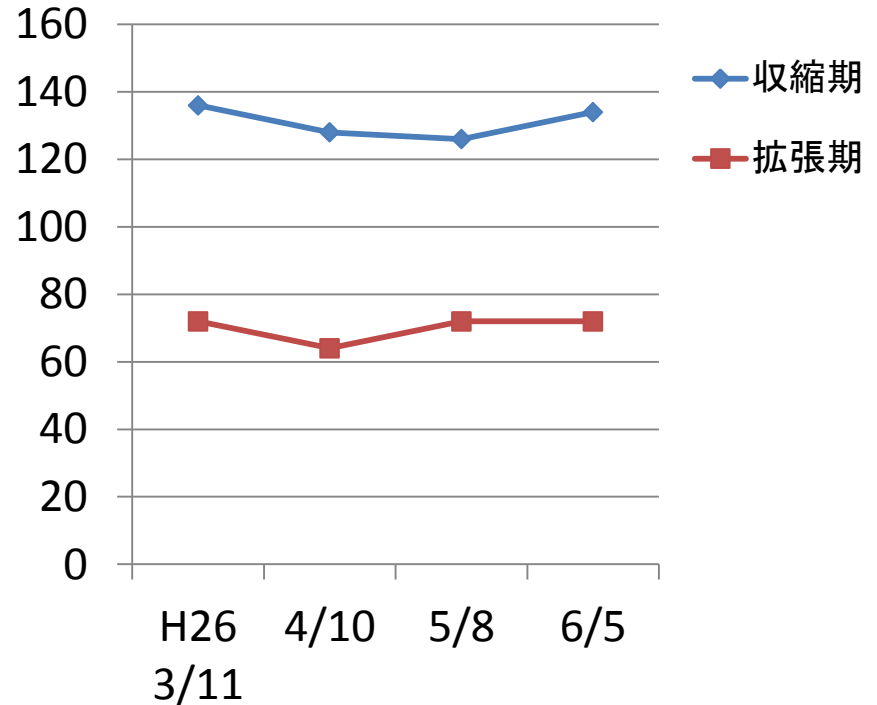
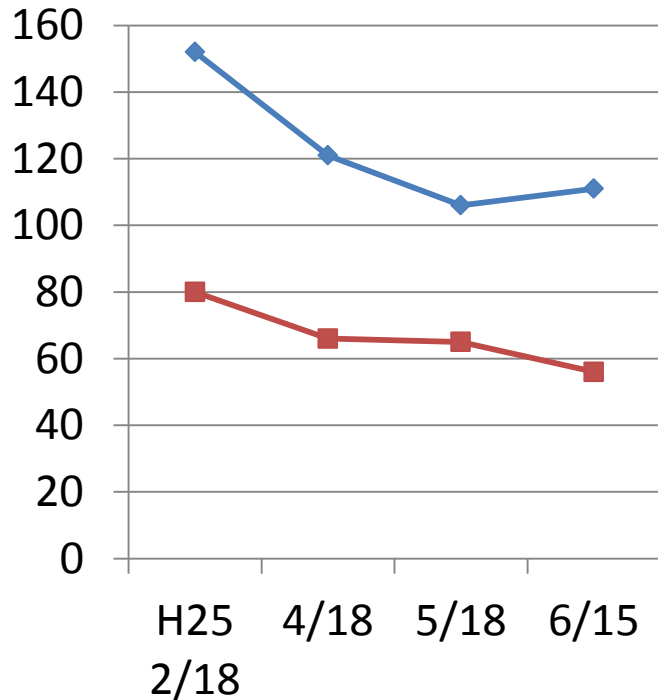
引き続き通院中のY医院では、血圧経過観察から、アムロジピンの追加は不要とされた。

[血圧の変化]

介入前



介入後



アムロジピン削除後も血圧上昇はみられず、症状は安定していた。

【薬の管理状況】

介入前



介入後



2ヶ月分以上の
薬が残っていた。



H26.6月の服薬率
は67%であった。

【多職種の声①】

＜ケアマネージャー＞

- 主治医サイドから、服薬コンプライアンス向上を求められる場面があり困惑していた。しかし、薬局の介入により、薬のことは薬剤師に任せることが出来るようになり助かった。
- 介護職は、医療知識が十分でない部分があるので、薬剤師には医療職（特に医師）と介護職の橋渡し役を期待したい。

【多職種の声②】

＜医師＞

- 薬剤師の介入後、患者が精神的に安定してきたと感じる。

＜ヘルパー＞

- 薬剤師訪問を利用者に伝えることに苦勞は感じない。
- 薬は整理されるようになったが、まだ飲み忘れが多いように思える。

【ケアマネの紹介】



利用者のことを一番に思い、情に熱くかつ冷静で、相談すると色々な意見を提案してくれる方です。

【考察】

今回の事例のように、ケアマネージャーに相談→ケアプランの変更・ヘルパーからの声掛け、と一連の行動から問題が速やかに解決され、さらに薬剤師訪問がスムーズに行えるようになったことが減薬に至るサポートに繋がったと考えられる。

また医師のコメントにもあるように、薬剤師の介入により患者の精神状態が安定し、症状の一つであった不安障害が改善されたと考えられる。

改善は為されたものの、未だ飲み忘れがみられる。今後も残薬状況をヘルパーに報告してもらい、お互いの連携を深めるなど、さらなる服薬コンプライアンスの向上に取り組む必要がある。

【薬局紹介】



**三重県松阪市 薬剤師4名(内パート2名) 事務員2名
在庫1,062品目 [薬局内設備] 無菌調剤室、
散剤全自動分包機、散剤監査システム、電子薬歴など**

日本在宅薬学会 COI 開示

筆頭発表者名： 寺田 信太郎

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある
企業などはありません。